

コロナ禍における学生との対話型授業の試み — 今, 子どもの文化を問う —

Der Versuch eines interaktiven Unterrichts mit StudentInnen
in der Corona-Pandemie
— Jetzt die Kinderkultur hinterfragen —

船 越 美 穂

Miho FUNAKOSHI

学校教育ユニット

(令和3年9月28日受付, 令和3年12月23日受理)

はじめに

2020年のコロナパンデミックの中, 私たちの生活様式は一変した。大学での授業は突然, 遠隔授業となって, 新しい挑戦を学生も教員も行わねばならなかった。学生たちは感染防止ルールを守り, 自粛した生活をするを迫られた。2020年度前期授業の感想などで, 学生たちが多くのことを我慢する一方, 一層, 人との繋がりを求めていることが理解できた。

後期授業「児童問題研究」(初等教育教員養成課程幼児教育選修2年生対象の専門科目)では, 通常はグループワークとフィールドワークを中心に子どもを取り巻く問題について多面的に取り組んでいる。しかし2020年度は幼稚園や保育所などの施設への立ち入り自体遠慮する必要があった。そこで筆者は, コロナ禍の中, 授業方法だけでなく, 授業内容をも大きく変えることを決意した。コロナ禍の中だからこそ取り上げるべき問題に挑むことが大切だと考えたからだ。

学生たちは忍耐を強いられる生活の中で, 自らの感情を抑え込んでいることが推察された。授業の中では, 学生が自分の様々な感情に気づき, それを表現することのできる対話が特に必要であると考えた。筆者は2019年10月にドイツの幼稚園の哲学の時間を見学した。その時の印象が強く, この方法を学生の授業でも応用することにした。授業内容は学生自身が自らの感情に気づき, 表現

するためのツールとして絵本を主に取り上げることにした。感情教育の方法として絵本を用いることも, ドイツの幼稚園ではよく行われている。筆者の授業では, 絵本だけでなく, 子どもの文化全体への問い直しをももくろんでいた。コロナ禍によって, 子どもたちの文化的及び芸術的な生活に参加する権利がどうしても後回しにされがちな状況の中であって, 児童文化¹の観点は重要であると考えたからだ。

当時は, 映画『鬼滅の刃』が観客者数を記録的に伸ばし, 連日マスメディアの話題になっていた。2020年度に筆者がフィールドワークを行った幼稚園や小学校での運動会では, 『鬼滅の刃』の主題歌が表現活動のBGMとして使用されていた。日常的にも, 子どもたちは『鬼滅の刃』の和柄のマスクをつけて, 遊びの中でも再現して遊んでいた。授業の中では, 『鬼滅の刃』についても学生と語り合ってみることにした。なぜなら児童文化の内容には, 「子どもの生活のための文化的向上運動」²が含まれており, 子どもの情操の育ちを促す芸術運動という性格が強いからである。ただマスメディアに取り上げられて, 人気があるからという理由で迎合するのではなく, 将来教員や保育者になる学生には, 子どもの文化を見抜く眼差しを育んでもらいたい。

以上のような経緯によって, 筆者は学生と新たな試みに踏み出した。ここに記すのは, 学生との

15回に渡ったリアルタイム型オンライン授業(表1)の軌跡の記録である。それは学生一人ひとりにとっても、授業全体にとっても一つの物語のようであった。本稿では、授業における対話によって、学生が様々な感情にどのように気づき、子どもの文化を見る目がどのように変わっていったのかを明らかにすることを目的とする。研究方法は、学生との対話の記録と学生の感想を分析することによる。

なお、学生に対しては、本研究の目的と意義、研究方法、研究への協力の自由意思と拒否権、プライバシー及び個人情報の取り扱い等について説明を行った。その上で、授業後の感想、レポート、及び学生の作品名と解説などの文字情報データの使用について、書面によって許可を得た。

表1. 第1回授業での配布資料

<p>2020年のコロナ禍の中、皆さんは何を考えたか、感じ、経験したでしょうか。今年度の本授業では、まず、コロナ禍の中で感じたこと、考えたこと、あらためて大切であると思ったことについて意見交換をします。2回目以降では、子どもの文化に焦点を当てて進めていきます。具体的には、人間の喜怒哀楽などの感情や人生に関わるテーマが表現されている絵本、紙芝居、お話、歌、詩などを各自で選んで紹介してもらいながら、意見交換をします。授業の中では、実地指導講師の方に子どもの文化についてお話をさせていただきます。後半は個人ワークに取り組んでもらいます。自分で子どものための文化を創造してください。その成果を発表してもらって意見交換をします。</p>
<ol style="list-style-type: none"> 01. オリエンテーション、意見交換「コロナ禍の中で感じたこと、考えたこと」 02. 悲しみを表現している文化財 03. 恐れや怖さ、そして怒りなどを表現している文化財 04. 喜びやユーモアを表現している文化財 05. 不思議さを表現している文化財 06. 勇気を表現している文化財 07. いのちを表現している文化財 08. 愛を表現している文化財 09. 学生からのリクエストテーマ 10. 実地指導講師による授業「わらべうた」 11. 実地指導講師による授業「生活と文化」 12. 平和を表現している文化財

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 13. 『鬼滅の刃』をテーマとして対話してみよう 14. 個人ワーク発表 15. 個人ワーク発表 16. 実地指導講師による授業「子どものための演劇」 |
|--|

I. コロナ禍の中で感じたこと、考えたこと

学生とのリアルタイムのオンラインによる対話を通じた授業はコロナ禍の中で学生が何を感じ、考えているかを伝えることから始まった。対話をしていく中で次第に授業の進行手順が作られていった。毎回、最初に、「今日は誰がまず話してくれますか?」と投げかけると、発言をする学生が挙手をする。その学生が発言をした後に、筆者は「次は誰が繋がってくれますか」と学生たちに投げかける。発言する、しないは学生の自由意志に任せた。そして何も間違いはないと繰り返し伝えることで、安心して思いを表現できる場作りを心がけた。オンラインのリアルタイム授業の中で学生たちは対話を通して繋がりを取り戻すことに挑んだ。

初回のテーマに関しては、学生のアルバイトでの出来事、家族のこと、社会の風潮に関わって次のような発言があった。

「優しい心を持つことが大切」、「人とつながりが薄れた気がする。」、「これまではバイト、学校、部活でバタバタしていて、自分の気持ちに向き合う時間がなかった。今は忙しいことがありがたいと感じている。親に会えなかった。そんな中で、人と関わり、一緒にいること、支え合うこと、友人の大切さ、自由の大切さを感じた。」、「バイトでマスクをすることで、高齢者とのコミュニケーションが難しくなった。高齢者の表情を見てそう感じる。」、「感染者への誹謗中傷に心が痛む。」、「人と会える幸せを感じる。」、「遠隔授業によって話し合いの時間が減った。目を見て話すことができなくなって、あったかさを感じる事ができない。」

16名の学生のうち初回の授業で発言したのは9名だった。あとの学生は他者の言葉に耳を傾けながら自問していたのであろう。授業後の感想で全員がテーマについて深く考えていることが理解できた。以下は授業後に提出された学生の感想の一部である。

「自分のおじいちゃんが体調を崩したが、コロナ禍でなかなか診てもらえずやっと診てもらえた時には癌が少し進行した状態でした。幸い大事に

は至らなかったが、医療問題はとても深刻であることがとてもよく分かったし、大変なんだと感じた。また、これからおじいちゃんを含め、いつ自分の前からいなくなるかわからないとも思った。自分にささげてくれた愛情を返す番なので、おじいちゃんを含め家族に感謝の気持ちを持って接していこうと思いました。」

「マスクによって表情や言葉によるコミュニケーションがしづらくなったことにストレスを感じる事があった。バイト先には、高齢者のお客様が多く、マスクで口の形が見えなかったり、目は感情を表す上で一番大切ということは変わらないがそれ以外の口や頬など他の顔の部分があつての表情を使ったコミュニケーションが取れていたのだと改めて感じる事ができた。また、人に会えない時期で自分と向き合う時間が増えたり、変化のない毎日にうんざりすることや、成人式の前撮りで家族が集まる予定だったのに、祖父母には会えなくなったりというようなこともあった。コロナが完全におさまる状況がいつかわからないという不安の中でいまだに会えない人やもう会えなくなってしまう人もでてくるのではないかと不安を感じてしまう事があったり、それと同時に電話や会う以外のツールの大切さも同時に感じた。」

「人と顔を合わせて話すことの大きさがわかりました。今まで当たり前だった人と直接会って話すと一緒にいるということがコロナ禍の中でよりありがたみを感じ、大事にしようと思いました。」

「自粛期間で家に一人であることが多くなって、人と直接会って話すことがなかったので、自粛期間が終わって友達と会えるようになって、直接話すことの大切さを感じました。SNSでは連絡はとってはいましたが、文面だけでは伝わらないことも多くて、顔を見て相手の声のトーンなど聞いて話すことで自分がどう思っているのかなども伝えることができ、直接会話ができたことは幸せなんだと感じました。」

「私は、直接会ってみないと人の良さが伝わらなかつたり、誤解が生まれてしまうことがあると思いました。例えば、遠隔授業の中で文字だけを見ているときは、味気なかつたり堅いイメージをもってしまっている、対面に切り替わったときに、『こんなに面白い先生だったんだ』と印象がガラッと変わる機会が多かつたように思います。やっぱり声の抑揚であつたり表情であつたり、さまざまなことが機械化している世界にも関連して考えてみると、人の良さはそういった感情やあ

たかさに関わる部分にあると感じました。」

「コロナ禍でのことを考えるとどうしても悪い面ばかりを見てしまいがちなのだが（実際に日常がガラリと変わった人が多いので当たり前のこと）、自分にとってプラスになったことがいくつもある。まず、生まれた時間でほかの分野の勉強など新しい面に挑戦することができた。一人で過ごす時間が増えたことで、一人で行動することに抵抗感がなくなったしある意味『自由』だと思って一人でのんびり過ごす時間を満喫できた。また、普段なら連絡を取ることをのこつた人と取るようになって、人間関係が広がった。誰しもコロナ禍で何かしらのストレスを抱えていると思うが、視点や考え方を変えると自分の生活を豊かにすることもできるということを感じている。」

「外に出て空気を吸ったり景色を見たり自然を感じたりするということも大切であるなと思った。元々家で過ごすことが好きだったが自粛期間中は外に出るという行為が制限されるようになり、そうなったときにとってもストレスを感じてしまったため、人は外に出て体を動かしたり自然と関わることも生きるために必要な行動なのかなと感じた。そして気分転換として外を見る機会も多く、いつの間にか桜が咲いていたり夕焼け空が綺麗だつたり月を眺めたりと自然の様々な変化に気付きその面白さや不思議さを感じる事ができた良い機会であつたと思う。」

「私の姉が特別支援の介護職をしていて、世の中が自粛している間も仕事をしていました。利用者もコロナの中で家に帰ることができないので、いつも以上に休みがなくて疲れている様子でした。介護だけでなく看護やその他の職業でも、自分が『何もすることなくて暇』と思っている間にも、社会のために頑張っている人がいることを改めて感じ、自分も何か行動を起こさなければならぬなと思いました。人と人との繋がりや社会の繋がりを深く感じました。」

「自分の今までの当たり前の生活は当たり前ではなくて、とても幸せなことだという考えが一番強いです。人も物も当たり前がとてつありがたくて日頃気づかなかつたことにこの状況になつたからこそ気づけたし、大切にしなければいけないと思いました。また、この状況をただ退屈に過ごすのではなく自分から何かアクションを起こして自分で充実させていくことも大事だと感じたし、それは何に関しても言えることだなと思いました。」

「コロナ禍になって今まで普通だと思つていた生活がガラッと変わり、人と話す機会が減つて一

人の時間が多くなりました。そんな中で、家族に対する感謝の気持ちや友人がいることのありがたさを感じました。少しコロナが収まってきたところにバイトが始まり、電車に乗る機会が少しずつ増えてきたときに感じたことなのですが、マスクをしている時の他人の視線が少し怖いと感じました。せきやくしゃみをしたときに嫌な気持ちになるのは理解できるけれど、そこまで怖い視線を送らなくてもいいんじゃないかと思ってしまうことが何度かあり、もっと温かい気持ちを持っておくことを大切にしたいと感じました。」

II. 絵本をめぐる対話 —感情に気づく—

第1回授業でコロナ禍の中での自分の不安や苦しさを表現した学生たちに、2回目以降の授業では、人間の感情に焦点を当てながら児童文化財に向かい合うことを提案した。テーマは、悲しみ、恐れや怖さ、怒り、喜びやユーモア、不思議さ、勇気、いのち、愛を提示した。初回は、筆者によって「悲しみ」を表現している子どものための文化財を紹介する課題を出した。その後は毎回、授業の最後に学生の気持ちに添いたいと考え、学生自身に候補の中から次回のテーマを選んでもらった。また、リクエストテーマとして、学生から「友情」が選ばれた。12月25日（第12回）には特別テーマとして「平和」を取り上げた。子どものための文化財は絵本、紙芝居、お話、歌、詩など幅広い分野から選んで良いことを伝えた。結果的に、大半の学生は毎回、絵本を用意した。しかし中には、映画やアニメ、テレビ番組を紹介する学生もいた。実物を準備して紹介することを原則としていたが、携帯電話を通して画像を示す場合もあった。

1. 悲しみ

私たちは年齢を重ねるほど、悲しみや怒りの感情を抑え込み、自らの中で処理することが多くなっているのではないだろうか。そして、この傾向は就学前施設の保育者に特に多い。日本の保育者たちはたとえ自身に辛いことがあっても、その感情を表出せず、いつも笑顔を絶やさずに子どもたちを受け止めることが求められる傾向が強い。しかしコロナ禍の中で重要なのは、感情を抑えることではなく、気づくこと、表現することである。従って、授業ではまず「悲しみ」を表現している児童文化財を紹介しあって、その特徴について意見交換を行った。

学生たちは選んだ作品を通して、悲しみの諸相

として、①愛する存在との別れ、②孤独、③日常生活の破壊、④報われない愛、⑤相手の幸せを思って身を引く—自己犠牲、⑥人と違うことを受け入れてもらえないこと、といった特徴を抽出することができた。

絵本『わすれられないおくりもの』では、当初は友達のアナグマの死をめぐる悲しみと受け止めていたのが、学生たちは対話の中で、アナグマとの思い出や残してくれたものによって「悲しみを乗り越える」ことができるということに気づいた。学生たちは「悲しみ」の多様性について、子どもための文化財を互いに紹介する中で理解することができた。以下は授業後に提出された学生からの感想である。

「子どもが親しみやすいものとして、今日見たような絵本、アニメというような悲しみを表す文化財があり、自分自身の記憶にも残っていることから、文化財とは、体験したことのない悲しみを伝えてくれたり、これからの人生の基礎となっていく重要なものであると感じた。子どもが日常で感じる悲しみの中にも、別れが引き起こす悲しみや、子どもの時期だからこそ相手に伝えたいことが伝わらないもどかしさからくる悲しみ、人と違うことを初めて気づかされた時の悲しみというようなものがあると考え。このように子どもも日々の生活の中で悲しみを覚えることはあるため、その時に、子どもと関わる大人が今日のようなたくさんある文化財をその場面に応じて提供することで子どもなりに考えを持つことができたり、新しい考え方がもてたり、その先の人生において必要な記憶となって積み重ねていくことができる。」

「私の祖母は今、末期の癌で入院しており、すでに呼吸器を付けている状態である。あと少しかもしれないという不安を最近ずっと感じている。しかし『わすれられないおくりもの』の話を聞いて、祖母が贈ってくれたたくさんの思い出を大切にすれば、その悲しみを乗り越えられると思った。もう少し思い出を重ね、贈り物を忘れずに胸に留めていこうと思う。悲しみの児童文化財をみることで、悲しい気持ちになるだけでなく、救われることもあると気づくことができた。また、悲しみを知ることで、他者を悲しませないようにしたいという気持ちも強まった。最近改めて絵本などを読むと、幼いときに気づかなかったメッセージに気づくことが多い。子どもにも多くの文化財を伝え、将来に生きるかもしれないと考えながら、心を育てていきたい。」

「悲しみを表しているものでみんな絵本を持ってきていたけど、同じ絵本でも1つの悲しみではなくて、様々なことから感じられる悲しみがあって、悲しみってこんなに種類があったのかと実感しました。大切なものを失う悲しみ、後悔からの悲しみ、思いやりゆえの別れの悲しみ、日常生活の破綻による悲しみなど様々あって、子ども達が悲しみの場面に面した時に、うまく慰めたりができない時にこういったその子のその状況に合わせた絵本を読んであげられるようになりたいと思いました。子ども達は日々の生活の中で、親がけんかするところを見てしまったり、大切に飼っていた生き物が死んでしまったり、弟、妹の出産により今までの生活が変わってしまったりなど様々悲しみをを感じる場面があると思います。その時に、その子の悲しみを受け止めて、そんな風を感じるの自分だけではなくて、共感されるものなのだというのを絵本を通して伝えていきたいなとも思いました。」

「確かに喜びや楽しさを表現した明るい作品にも良さはあるが、悲しみを表現する作品を子どもたちと一緒に読み共感する機会をつくることも非常に大切だと思う。子どもたちがこれから成長していくなかで明るい感情だけでなく『悲しみ』も生まれる。幼稚園・保育所にいるときは親としばらくの間、別れないといけない、友達におもちゃをとられた、喧嘩したといった日常のなかでの悲しみ、身近な人が亡くなったり離婚したりと自分の望まない別れなどの悲しみ、LGBTや人種、障害に関する差別から生まれる悲しみなどたくさんの場面で悲しみと出会う。そのとき悲しみを表現する文化財に触れ、悲しみを体験することで、生活の中で生まれた悲しみを乗り越えるヒントとなったり、悲しい思いをしている人の気持ちを考え共感するようになったりと、自分で問題解決する力や感受性を豊かにすることができるのだと思う。子どもたちの感性をより豊かにし、成長する手助けとなる悲しみを表現する文化財は子どもの文化のなかで大きな役割を担うものであり、保育者はそのことを理解し悲しみと関わる機会を積極的に取り入れていくべきだと考える。」

「AさんとBさんが紹介したマッチ売りの少女では、どこにも逃げ場がなく、誰も助けてくれる人のいない少女の孤独感がありました。私はこの絵本を読んだ時に、少女がかわいそうだという気持ちのほか、つらい生活から解放されてよかったという気持ちが少しありました。このような感情は少女を客観的に見たときに生まれる感情で、

少女の気持ちになってお話を読むと、孤独感や無力感というものが理解できるのだと感じました。このことから、悲しみを伝える文化財は、例えば絵本だった時には、その絵本に出てくる主人公や客観的に見てかわいそうだと感じる登場人物の視点に立ち、自分のことのように考えることで生まれ、伝えることのできる感情だと思いました。どんなに登場人物にとって悲しいことが起こっていても、その登場人物の気持ちに寄り添い感情を想像できなければ理解することのできない感情だと思いました。」

2. 喜びやユーモア

学生たちとの対話を通して、喜びやユーモアを表現している子どものための文化財がいくつかの要因によって成立していることが分かった。それは、①絵にインパクトがある、②日常と非日常、現実と想像の世界の間の交差に面白さがある、③擬音語、擬態語、言葉遊びがみられる、④関西弁の使用、⑤意外な一面が見える時、⑥弱者と強者のアンバランスや逆転がある、などであった。この授業回より、絵本だけでなく、映画、テレビ番組などを紹介する学生が登場する。

筆者にとっては、喜びやユーモアであると思う観点が、一人一人によって違っていることが興味深かった。例えば、『フレデリック』をユーモアの絵本として紹介した学生がいた。筆者はこれまで『フレデリック』をユーモアの観点で見たことはなかった。しかし、最後の極寒の空腹の状況の中でフレデリックが行った行為は、ある意味でユーモアとして受け止めることができるのかもしれない。苦悩や悲しみをもユーモアで乗り越えるという捉え方に気付かされた。そして、授業の中では、本当のユーモアとはヒューマニズムの精神が溢れているものであることを確認することができた。

3. 恐れや怖さ、そして怒り

学生たちの選んだ恐れや怖さ、そして怒りを表現している作品は、日本や外国の昔話、戦争をテーマとしているもの、しつけ本、自然の脅威や破壊に対する怒りをテーマとするものに渡っていた。

物語の怖さに関して、「怖さや恐怖は人間や動物が自らを守るための感情だ。恐怖を感じることができることは必要だ。」といった意見が出された。恐怖を交えたしつけ本については、「子どもはちゃんとしないと、困ったことが起きる」と

いったことを学べること、つまり「代償があって学ぶ」ことができるといった発言があった。1845年にドイツで誕生した『もじゃもじゃペーター』³以来、子どものしつけのために恐怖を与える絵本は少なくない。このタイプの絵本は日々の保育にも無意識のうちに浸透している。保育者として、児童文化財における怖さの質を見抜く目が問われている。

以下は学生の感想である。

「生きていく中で恐れや怖さ、怒りといった気持ちになったときに、自分の思いを押し込めちゃうことなく、きちんと受け止めるための練習にもなると思います。子どもが安心感を感じる環境のもと、意味のある文化財を伝えたいです。」

「子どもたちにとって、恐れや怖さ、怒りの意味とは、絵本の中の出来事などを自分に置き換えて考える教訓的なものであったり、しつけなどの怖さであったり、生きていく力として自分を守るときの本能的防衛感情であるなど、快樂だけでは分からない感情などの学びであると思った。」

4. 愛

学生たちが選んだ作品には親子愛、ペットをも含む家族愛、友愛、恋愛、博愛など多様な愛の形が描かれていた。対話を通して、愛によって勇気を持てること、強くなれること、自分の名前を呼んでくれる人の存在によって支えられること、種類の違う動物であっても親子愛は成立することなどに気づくことができた。ある学生はYou Tubeを使って聴覚障害を持つ父親と娘の物語が描かれているタイのコマーシャルを紹介した。学生の感想は以下の通りである。

「わたしは今回愛と聞いて一番初めに思いついたのが絵本ではなく外国のCMだったんですけど、娘と聴覚障害を持った父親の家族愛がとても切なくて感動的で選びました。娘を助けるために命までかける父親の無償の愛が印象的で、みんなに動画を見せたときに泣いている人もいてみんなの心に刺さっていたようなので見せてよかったなと感じました。私は親子愛を選んだが、他にも友愛や恋愛、博愛、物に対する愛情などさまざまな愛の形があって考えれば考えるほど複雑なものだなと改めて思いました。」

5. 勇気

はじめておつかいに行く勇気、一人で祖母の家まで行く勇気、そして「一緒に遊ぼう」と言う勇気など日常的な子どもの目線での勇気に着目して

いる学生が多かった。学生たちは勇気も様々な形があることを知った。子どものはじめてのおつかいに伴う感情に共感することによって、学生自身もまた授業で発表する時に勇気を出していることに気づいた。そして勇気を出すためには、必ず支えてくれる友達や仲間がいること、勇気を出すまでには相当な葛藤があること、誰かのためにする勇気、自分の成長のための勇気があることを対話を通して明らかにした。以下は学生たちの感想である。

「私は新しいことを始めるのに、とても怖さを感じます。不器用だし変化が苦手な、挑戦できない自分が嫌だと思っています。しかし、みんなの文化財や話を聞いて、自分も日々の生活の中で小さな勇気を出していることに気づくことができ、ちょっとだけ自分を褒めようと思いました。ただ、自分を変えたい、その思いは消えません。日々小さな勇気を積み重ねて、なりたい自分になるために、大きな勇気を出したくなりました。今の目標は、新しいバイトに応募してみることで。」

「『勇気』と聞くと、何か大きなものを想像するけど、日常にも勇気は生まれることがあって、何かしら私たちは勇気を持って行動しているんだなと思いました。1人で行動する勇気であったり、挑戦する勇気は、自分の成長のためでもあるし、人とのつながりや新しいことへの発見にもつながるのではないかと感じました。また、その勇気を振り絞る前に、様々な葛藤であったり、他人や物からの支えがあって勇気を出して行動できている部分もあるんだなと感じました。」

「昔からさまざまなことに緊張しやすく勇気を出すことが得意ではなかったけれど、改めて考えると勇気を出すことはどんなことでもいいことにつながっていると感じます。それが自分のことだとしたら自分の成長につながったり経験や学びにつながるし、他人のためなら他人にとって救いになっていたりといういいことにつながっていて、勇気を出すことはすごく素敵なことだと改めて感じました。」

「みんなの勇気の文化財を見て、『勇気』はたいそうな大きな決断や行動の時というイメージが今まではあったけど、実際は話したことのない友達に話しかけたり、人前で発表したり、また体育の時に新しい技に挑戦したり、みんなのお手本となって前で実演したり、そういうことにも私たちは小さな勇気を使っていると思いました。年齢によって勇気を使う場面は異なってくるけど、ほ

とんどが慣れてくると勇気がいらなくてもできるようになったりするなかで、幼い子どもにとってはほとんどの経験が初めてだったりするから、勇気を使う場面は少しだけ多いのかなと思ったし、そういった子どもたちに勇気の絵本などを読んで、絵本の中での場面と現実の自分とを重ね合わせ、勇気をだしていけるような後押しができればいいなと思いました。」

「勇気と一言と言っても、鬼に立ち向かう勇気、『初めて』に対する勇気、誘う勇気、自分を変える勇気、謝る勇気など、たくさんの勇気があります。その勇気の大きさの捉え方も様々で、私たちから見ると小さな勇気でも、本人からするととても大きな勇気になるかもしれません。このことに気づくことができ、他人の勇気の大きさを私たちが決めつけることはできないと感じました。小さな勇気というものはないのかもしれませんが、一歩踏み出すことがやっとな人もたくさんいるということ、自分と他の人の考え方や感じ方は違うということを学びました。」

6. 不思議

子どもにしか見えない世界が存在すること、不思議さはファンタジーの世界だけでなく、日常の中にも子どもにとっての不思議さがあることを知った。ある学生は月の気持ちで書かれた作品を紹介した。月と人間の関係に視点を置く世界観に関心を持ったこの学生は、後半の子どものための作品作りに表現として結実させていくことになる。子どもの視点で物事を眺める姿勢は、保育者にとって大切な資質でもある。以下は学生たちの感想である。

「大人になると日常にある様々な事象が当たり前になっていたりして見落としがちであるけれど、子どもはそうした身の回りの世界に全身を使って関わっているからこそ子どもだけが見える世界の中で多くの不思議と出会っているのだなということが分かり、改めて日常を振り返り様々な事象に不思議だと思ふ気持ちを持つことを大切にしたいと感じました。そして子どもが不思議だと思ふ気持ちに共感し大切に一緒に同じ世界を楽しむ保育者であるとともに保護者にも子どもの世界に共感することの良さを伝える方法として文化財を用いたいなと思いました。」

「聴覚だけでなく、その他の五感でも、大人は基本的に必要な情報だけにしか意識を向けていないのに対して、子どもは五感をいっぱい働かせながらいろんな情報を感じることができるんだなと

思いました。雲が面白い形をしていることや昨日まで蓄だった花が咲いたこと、小鳥の鳴き声、風の音や匂いなどいろんなことに気づくとともに、そこから想像したり、実際に小鳥同士の会話が聞こえていたりするのかなと感じました。そのような子どもの感じ方や子どもの心を大切にしながら共感していきたいと思いました。」

「おとなになるにつれ、多忙になり見方が狭まっていき今までは感じていた小さな不思議に気付かなくなっているのではないかと思います。そのため、イヤホンをつけてスマートホンを見てばかりでなく、音や足元での小さな出来事など世界にたくさん広がっている不思議の源にふれようとする中で、想像力が豊かである子どもたちに共感できるのではないかと思います。子どもたちと一緒に体験し、不思議さを共有することで子どもに寄り添ったかわりができると思うので、この考えを大切にしていきたいと思います。」

「大人が見ている世界と子どもが見ている世界が異なるということに気づくことができ、この気づきは子どもが感じる日常の疑問やおもしろさなどさまざまなことに共感できるようになると感じました。スマホを見る時間が増え、外に行ってもイヤホンをする時代になっていますが、私も自然に耳を傾け、いろんなものを見て、何かを感じる素晴らしい機会を失っていることに気づくことができました。時には、イヤホンを外して、五感で感じる世界を楽しみたいと感じました。そして自分が親になったり保育者になったりした時に、子どもたちが日々感じている不思議な出来事に共感しながら、共に感性を高めていきたいです。」

7. いのち

「いのち」をテーマとする作品は多岐にわたっていた。それらの作品と紹介者の学生の発言を通して、「いのちのつながり」を共通認識することができた。それは『こいぬのうんち』に描かれているうんちや土くれの中にも、食肉センターで命を「解かれる」ことで食卓に上る牛肉の中にも、日常的に食べているラーメンの中にも存在していることを理解した。学生との対話の中で、「いのちのつながりは大切な人を思い続けることである。思い続けることがいのちのつながりに関係している。」といった発言や、「いのちは過去と未来でつながっている。そして食物連鎖のように命をいただくことで生かされている中でつながっている。」といった考えが示された。コロナ禍の中で多くのことを経験したのであろう、学生たちのい

のちへの向き合い方はとても真剣で、謙虚でもあった。

「自分の中で今日のキーワードなんじゃないかと思うのが、『命のつながり』です。自分が生まれたのは、様々な人の命がつながってきたからその命であるし、自分も次につながる命のバトンを渡す輪の中にいるんだということにも気付くことができ、不思議な気持ちになりました。たとえ大切な人・ものをなくしても、自分の心の中で思い続けていれば『いつもそばにいる』という気持ちになって、それも命のつながりだなと感じました。」

「今回の自分の絵本の紹介やみんなの紹介を聞いて、『自分が生きる』ということは、多くの命をつないでいるということなんだと感じました。命をつなごうと意識していないけど、食べるという行為であったり、亡くなった人のことを想うこと、毎日を生きるということなど無意識のうちに動物や植物や人などの多くの命をつないでいる存在であることを感じ、その責任を感じながら命を大切に生きていかなければならないと思いました。また、人や動物など動くものに命があり生きていることは想像しやすいけれど、植物や物など動かないものにも自分たちと同じように命があり生きているのだということを、それらを主人公にしたりして焦点を当てた文化財と出会って知っていくことは大切だなと思いました。」

8. 友情

本テーマは学生からのリクエストで採用した。コロナ禍によってしばらく友達とも会うことができなかつた学生たちにとって、この間最も痛切に感じたのが友情だったことがうかがえた。学生たちはドラえもんとのび太、オオカミとヤギ、女の子と秘密の友達、赤鬼と青鬼、ガマとカエル、ティラノサウルスとエラスモサウルス、炭治郎と善逸と伊之助らのエピソードを紹介する中で、友情は年齢や国境をも越えてどんな人とでも結ばれることに気づいた。そして、友情には利害はなく、人は友情によって強くなれること、そのためには先入観を持たないで、勇気も必要であることを対話の中で確認した。以下はある学生の感想である。

「みんなの感想のなかで、今は自分と気が合う人や趣味が一緒の人と友達になりやすいけど、子どもの頃は、そういうのを気にせず、いろんな人たちと仲良く遊んでいたことを思い出しました。勝手にその人を決めつけてしまったり、自分とは

仲良くなれなさそうだと先入観だけで判断したりしているのは自分であり、自分自身が人とのつながりを減らしていたのだと気づくことができました。あまり話したことの無い人に話しかける最初の一言は、誰でも難しいことですが、勇気を出して声をかけることで、意外にも気があったり、自分に大きな影響を与えてくれる人だったりするかもしれないと感じました。」

9. 平和

筆者は12月25日の授業テーマを「平和」とすることを提案した。2020年を振り返る時、平和というテーマの中に全てが凝縮されるのではないかと考えたからだ。

学生たちは戦争で犠牲になった『かわいそうなぞう』、日常の当たり前から平和を描いている『へいわってどんなこと?』、『へいわってすてきだね』、人間と戦争を描いた『せかいでいちばんつよい国』、『永遠0』、『火垂るの墓』、『なぜ戦争をするのか? 六にんの男たち』、福島第1原子力発電所事故の警戒区域内の実話『希望の牧場』、谷川俊太郎の詩、そして長崎出身の学生の話や、広島原爆ドームを見学した学生の感想などを通して、平和について対話を行った。学生たちは平和とは当たり前の日常生活を送ることができることであると共通して言った。そして広島や長崎の歴史に学び、語り継いでいくことの重要性を理解した。さらに、いじめ、虐待、差別、貧困、失業が絶えない現代社会もまた、平和とは言えないことを共通認識した。

「平和は、戦争がない世の中のことだけをいうのではないということについても考えさせられました。戦争がなく、今のコロナという状況もなければ自分たちは結構ぬくぬくと育つことができている、小さな争いはあっても、平和じゃないと感じるような状況に置かれることがあまりないため、気付けない可能性があるけれど、戦争という国や土地規模の大きなもの、暴力的なものだけではなく、飢餓や差別、いじめなども平和を害すものであるということへの意識を持ち、みんなが安心して協力して生きていくことのできる世の中をつくるのが大切で、子どもたちが、日常の当たり前を守ることに、そういった問題を解決することが大切だという認識を持てるように大人である私たちが子どもたちに接していかなければならないと思いました。」

「戦争や自然災害、コロナなどによって当たり前の日常は急に壊れることもあるように、平和は

当たり前のもではなく繊細で常に危険と隣り合わせているようなものであるとも感じました。戦争は大人でも目をそむけたくくなるような残酷で恐ろしいものであるけれど、今あたりまえにできることがあたりまえじゃない時代があったことを知るためには子どもも向き合うべきものであると思うため、様々な文化財に触れて感性が豊かになってきた時期に温かい関係の中で取り扱うようにして戦争という事実をしっかり目を見て平和のために行動するきっかけとなる経験を子どもたちができるように支えたいなと思いました。そして自分自身も戦争について伝える存在としてもっと知識・理解を深めるようにしたいです。」

『『平和』というテーマを聞いたときは、平和な世界＝戦争がない世界というイメージが強かったが、今回の『希望の牧場』という絵本に出会って、当たり前の日常があることこそが平和だと感じました。大人になっても学び続けなければいけないと思うほど、平和教育は大切で、『命』や『愛』などのいろんなテーマにも結び付く、最大のテーマだなと思いました。戦争がないからと言って日本は『平和な世界』だと安心するのではなく、いじめや虐待、貧困、差別などの構造的暴力が存在することを理解し、積極的平和を目指して、これからも生きていかなければいけないと感じました。』

10. 学生が選んだ子どものための文化財

表2は学生がテーマにそくして選んだ子どものための文化財である。絵本を中心としながら、昔話、童話、詩、映画、テレビドラマ、アニメ、漫画、海外のコマーシャルが紹介された。言うまでもなく、これら全てを児童文化財に含めることはできないだろう。しかし、その一つ一つが学生自身がテーマと向き合って、責任を持って選んだ作品であることに変わりはなく、それこそが尊いのである。

表2. 学生が選んだ子どものための文化財

悲しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・大塚勇三作, 赤羽末吉絵「スーホの白い馬」 ・佐野洋子作絵「100万回生きたねこ」 ・アンデルセン「マッチ売りの少女」2名 ・中川ひろたか作, 長新太絵「ないた」 ・アンデルセン「にんぎょひめ」 ・城井文著「くものうえのハリー」 ・宮西達也作絵「おまえうまそうだな」 ・宮部みゆき作, 佐竹美保絵「ヨーレの
-----	---

	<ul style="list-style-type: none"> クマー」 ・ハンス・ウィルヘルム作絵, 久山太市訳「ずーっとずっとだいすきだよ」 ・ガブリエル・バンサン作「アンジュール ある犬の物語」 ・たばたせいいち作絵「さっちゃんのまほうのて」 ・スーザン・バーレイ作絵, 小川仁央訳「わすれられないおくりもの」 ・浜田廣介作, 浦沢直樹絵「泣いた赤鬼」2名 ・昔話「かぐやひめ」 ・映画「ドラえもん おばあちゃんの思い出」
喜びやユーモア	<ul style="list-style-type: none"> ・森山京作, 村上勉絵「いいものもらった」 ・映画「チャーリーとチョコレート工場」 ・ディズニーアニメ「トムとジェリー」 ・宮西達也作絵「おとうさんはウルトラマン」 ・川端誠作絵「落語絵本 じゅげむ」 ・川端誠作絵「落語絵本 まんじゅうこわい」 ・馬場のぼる作「11ぴきのねことへんなねこ」 ・鈴木のりたけ作「ぶららんこ」 ・岡田よしたか作絵「おにぎりに はいりたいやつ よっといで」 ・ヨシタケシンスケ作「りんごかもしれない」 ・マイク・セイラー作, ロバート・グロスマン絵, 今江祥智訳「ぼちぼちいこか」 ・マック・バーネット文, プライアン・ビッグズ絵, 椎名かおる訳「うるさいアパート」 ・長新太文絵「キャベツくん」 ・島田ゆか作「バムとケロのにちようび」 ・よしながこうたく作絵「あいさつ団長」 ・レオ・レオニ作, 谷川俊太郎訳「フレデリック」 ・さとうわきこ作絵「あひるのたまごーばばあちゃんのおはなし」 ・ヨシタケシンスケ作「りゅうがいます」
恐れや怖さ, 怒り	<ul style="list-style-type: none"> ・宮次男監修「絵本 地獄」 ・塚本やすし作「じごくわらしがくるぞ!」 ・映画「告白」 ・京橋夏彦作, 町田尚子絵, 東雅夫編「いるのいないの」

<ul style="list-style-type: none"> ・五味太郎作「わにさんどきっ はいしゃさんどきっ」 ・映画「もののけ姫」 ・ふくべあきひろ作, おおのこうへい絵「たべてあげる」 ・映画「千と千尋の神隠し」 ・仲里ハル話し手, 榎本守聞き手, 松山ちはや絵「戦争にいつてきたハルちゃん」 ・中沢啓治作絵「はだしのゲン」 ・長崎源之助作, 長谷川知子絵「えんぴつつびな」 ・たにかわしゅんたろう文, Noritake 絵「へいわとせんそう」 ・中村博作, 石橋欣二絵「にげだしたおにばんば」 ・トミー・アングラー作, 今江祥智訳「すてきな三にんぐみ」 ・ノルウェー昔話, マーシャ・ブラウン絵, 瀬田貞二訳「三びきのやぎのがらがらどん」 ・グリム童話「おおかみと7ひきのこやぎ」 ・せなけいこ作絵「ねないこだれだ」 ・昔話「おいてけぼり」 		<ul style="list-style-type: none"> 訳「ずーっとずっとだいすきだよ」 ・映画「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶオトナ帝国の逆襲」 ・「タイの生命保険会社 CM」
<p>愛</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テレビドラマ「はなちゃんのみそ汁」 ・サム・マクブラットニイ作, アニタ・ジェラーム絵, 小川仁央訳「どんなにきみがすきだかあててごらん」 ・筒井頼子作, 林明子絵「あさえとちいさいいもうと」 ・「プーさんとりんごのき」 ・斎藤隆介作, 滝平二郎絵「モチモチの木」 ・宮西達也作絵「あなたをずっとずっとあいしてる」 ・ウルフ・ニルソン作, エヴァ・エリクソン絵, ひしきあきらこ訳「おにいちゃんがいるからね」 ・刀根里衣作「ぼくのばしょなのに」 ・エミイ・ペイン作, H.A.レイ絵, 西内ミナミ訳「ポケットのないカンガルー」 ・竹下文子作, 町田尚子絵「なまえのないねこ」 ・やなせたかし作絵「やさしいライオン」 ・新美南吉作「てぶくろをかいに」 ・吾峠呼世晴作「鬼滅の刃」 ・映画「ぼくのワンダフル・ライフ」 ・ステファニー・メイヤー作「トワイライト」 ・ハンス・ウィルヘルム作絵, 久山太市 		<p>勇気</p> <ul style="list-style-type: none"> ・林明子作「こんとあき」 ・筒井頼子作, 林明子絵「はじめてのおつかい」3名 ・ペク・ヒナ作, 長谷川義史訳「あめだま」 ・映画「オズの魔法つかい」 ・マーガレット・ワイズ・ブラウン作, 林明子絵, 坪井郁美訳「ぼくはあるいたまっすぐまっすぐ」 ・昔話「いっすんぼうし」 ・レオ・レオニ作絵, 谷川俊太郎訳「スイミー 小さなかしいさかなのはなし」 ・田島征三作絵「とべバッタ」 ・マーカス・フィスター作絵, 谷川俊太郎訳「にじいろのさかなとおおくじら」 ・映画「ファインディング・ニモ」 ・ジャニス・メイ・ユードリー文, モーリス・センダック絵, こだまともこ訳「きみなんかだいきらいさ」 ・レイフ・クリスチャンソン文, にもんじまさあき訳, ほりかわりまこ絵「ゆうき」 ・アンティエ・グメルス作絵, ゆきのゆみこ文「こわがりうさぎホッペル」 ・マレーク・ベロニカ文絵, 徳永康元訳「ラチとらいおん」
		<p>不思議さ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なばたとしたか作「こびとづかん」 ・長谷川撰子作, ふりやなな絵「めつきらもつきらどおんどん」2名 ・松岡享子作, 林明子絵「おふろだいすき」 ・西巻茅子作「わたしのワンピース」 ・パウル・マール作, ニコラウス・ハイデルバッハ絵, 関口裕昭訳「ふしぎなエレベーター」 ・谷川俊太郎作, 和田誠絵「あな」 ・こさかまさみ作, さとうあや絵「どんぐりえんおばけ」 ・松田奈那子作「ふーってして」 ・ジーン・マルゾーロ作, ウォルター・ウィック絵, 糸井重里訳「ミッケ!」 ・「妖怪ウォッチ」 ・ピーター・ニューエル作, 高山宏訳「さかさまさかさ」 ・青山七恵文, 刀根里衣絵「わたし, お月さま」

	<ul style="list-style-type: none"> ・グリム兄弟作, リスバート・ツヴェルガー絵, 池田香代子訳「ハーメルンの笛吹き男」 ・ヨシタケシンスケ作「あるかしら書店」 ・オリヴァー・ジェファーズ作, 吉山朱里訳「ヒューイたちのあたらしいセーター」 ・レオ・レオニ作絵, 谷川俊太郎訳「うさぎをつくろう」 ・はぎのちなつ作絵「ちょびおじさんのプレゼント」 	<ul style="list-style-type: none"> もだち ・浜田廣介作, 浦沢直樹絵「泣いた赤鬼」 ・薫くみこ作, 飯野和好絵「あのときすきになったよ」 ・ジャニス・メイ・ユードリー文, モーリス・センダック絵, こだまともこ訳「きみなんかだいきらいさ」 ・中川ひろたか作, 村上康成絵「みんなともだち」 ・映画「アンパンマン」 ・片山健作絵「ココロさんのともだち」 ・なかやみわ作絵「そらまめくんとめだかのこ」 ・アーノルド・ローベル作, 三木卓訳「ふたりはともだち」 ・宮西達也作絵「きみはほんとうにステキだね」 ・古舘春一作「ハイキュー !!」 ・吾峠呼世晴作「鬼滅の刃」
いのち	<ul style="list-style-type: none"> ・相田みつを作「いのち」 ・スーザン・バーレイ作絵, 小川仁央訳「わすれられないおくりもの」2名 ・クオン・ジョンセン作, チョン・スンガク絵, ピョン・キジャ訳「こいぬのうんち」 ・佐野洋子作絵「100万回生きたねこ」 ・ルース・バンダー・ジー作, ロベルト・インノチェンティ絵, 柳田邦男訳「エリカ 奇跡のいのち」 ・坂本義喜原案, 内田美智子作, 魚戸おさむとゆかいななかまたち絵「いのちをいただく みいちゃんがお肉になる日」2名 ・岡本真夜作「ハピハピバースデイ」 ・長谷川義史作絵「ぼくがラーメンたべてるとき」 ・テレビドラマ「コウノドリ」 ・相田みつを作「自分の番 いのちのボタン」 ・土家由岐雄作, 武部本一郎絵「かわいそうなぞう」 ・アレックス・ラティマー作, 聞かせ屋。けいたろう訳「まいごのたまご」 ・レオ・バスカーリア作, 島田光雄絵, みらいなな訳「葉っぱのフレディーいのちの旅」 ・のぶみ作「さよなら ママがおばけになっちゃった!」 	<p>平和</p> <ul style="list-style-type: none"> ・浜田桂子作「へいわってどんなこと?」 ・長谷川義史作絵「ぼくがラーメンたべてるとき」 ・映画「もののけ姫」 ・安里有生詩, 長谷川義史画「へいわってすてきだね」 ・土家由岐雄作, 武部本一郎絵「かわいそうなぞう」 ・森絵都作, 吉田尚令絵「希望の牧場」 ・たにかわしゅんたろう文, Noritake 絵「へいわとせんそう」 ・谷川俊太郎詩「生きる」 ・ヨシタケシンスケ著「それしかないわけないでしょう」 ・ブリッタ・テッケントラップ作絵, 森山京訳「いのちの木」 ・デビッド・マッキー作絵, なかがわちひろ訳「せかいでいちばんつよい国」 ・マンロー・リーフ作絵, 光吉夏弥訳「みんなの世界」 ・映画「永遠0」(原作: 百田尚樹) ・映画「火垂るの墓」(原作: 野坂昭如) ・原爆ドームと平和資料館訪問の感想 ・デビッド・マッキー作絵, 中村浩三訳「なぜ戦争をするのか? 六にんの男たち」
友情	<ul style="list-style-type: none"> ・藤子・F・不二雄作「ドラえもん」 ・なかのひろたか作絵「ぞうくんのさんぽ」 ・なかのひろたか作絵「ぞうくんのあめふりさんぽ」 ・映画「あらしのよるに」(原作: きむらゆういち作, あべ弘士絵「あらしのよるに」) ・ジョン・バーニンガム作, 谷川俊太郎訳「ALDO—わたしだけのひみつのと 	

Ⅲ. 『鬼滅の刃』について語り合う

本授業では『鬼滅の刃』の人気の理由について対話を行った。学生の中には当作品のファンで、原作を全て読んでいる人もいた。その反対に筆者

をも含め、この授業を通して初めて作品と出会うケースもあった。なぜ、これほどこの作品は人気があるのかについて、学生から以下のような理由が挙げられた。

- ・分かりやすい構成である。鬼を倒すという設定は、昔話に共通したフォーマットで近づきやすい。
- ・鬼にもストーリーとなる背景があって、感情移入できる。
- ・鬼滅隊の一人一人の技が多様で、子どもも真似できる。
- ・主人公の家族愛、妹を救いたいという気持ちに共感できる。
- ・登場人物のキャラクターなどにユーモアが挿入されている。
- ・ストーリーが幅広い年齢層に受けられるように作られている。
- ・無惨を倒すという目的が明確である。正義感に感情移入できる。
- ・アニメの声優が豪華である。
- ・コロナ禍によってネットで普及した。

日本の昔話にも鬼は登場する。その相違点について、さらに対話を行った。まず、昔話の鬼との共通点は人間に害を与えるという発言があった。違いは、昔話の鬼たちは元々鬼として生まれた。しかし『鬼滅の刃』の鬼たちは元々自分たちと同じ人間であった。このことから、「どんな人間でも鬼になりうる」、「誰にでも起こりうる」ということになる。昔話の鬼たちは、鬼ヶ島や山に住んでいるが、『鬼滅の刃』の鬼たちは人間社会に共存している。また、鬼の数は桁違いに多く、鬼の中には優劣があって、支配・統制されて、群れないような仕組みとなっている。鬼の社会も競争やランク付けがされており、現代社会の反映であるといったことが対話の中で確認された。

最後に子どもにとっての影響はどうか学生たちに問うてみた。『鬼滅の刃』のファンである学生から、映画ではいきなり首が飛ぶシーンがあり、子どもがアニメと現実の境が理解できるのか心配であること、子どものための文化財としては適切ではないといった発言があった。別の学生からは、残酷性という点で幼児には向いていない、作品は大人向けであるといった発言があった。

『鬼滅の刃』に関連する様々な商品が発売されている。幼稚園や保育所に行くと、子どもたちは主人公の着物と同じ柄のマスクをつけている。ある学生は主人公の妹がキャラクター商品化して売り出されている和菓子を示して、商業主義が子ど

もたちの生活の中に浸透していると指摘した。別の学生は有名寿司店では登場人物の声が起用されていると指摘した。幼稚園や小学校の行事で『鬼滅の刃』の主題歌がBGMとして使用されていることから、大人の責任についても気づくことができた。社会的ブームとなった『鬼滅の刃』を子どものための文化の質という観点で対話を行なったことで、学生たちは客観的に作品に向き合うことができた。以下は学生の感想の一部である。

「子どもにも鬼滅の刃がはやった背景として、きょうだいや親が見ているのを一緒に見たからというのは思いつきましたが、商業として子どもの生活に入り込んでいるということや現代社会に似たところがあるというのは思いつかなかったので、なるほどと思いました。同調圧力について、昔からもあったかもしれませんが、情報を簡単に得られるようになった現代だからこそ、その傾向が強まったのかなと感じました。学校や幼稚園で子どもの流行りに寄せたくなる気持ちはわかりますが、運営においては商業的なものに飲まれてはいけないと感じました。」

「鬼滅の刃の映画を先日見てきました。なぜ幅広い世代に人気があるのか不思議に思っていたけれど、話し合いや実際に映画を見て思ったことは、年代によってウケる理由もさまざまなんだということが分かりました。私は、人間の『本当の正しさ』『どう生きるべきか』ということを日常では考える場面はそう多くないですが、このアニメを見ることによって考えさせられたり、生きていくうえで本当に大切なものは何かということを問うているような作者のメッセージ性の強い作品だから人気が出るのかなと思いました。欲と理性の葛藤の中でどういう選択をするかという人の核心にせまるような部分もあり、初心に返ることができる作品だと思いました。ただ、幼児教育でどう扱うかという点については真剣に考える必要があると思いました。」

「私も鬼滅について大きい私たちでもうわっと思うようなシーンもあるため、子どもの中にはそれらに大きなショックを受けて、無意識のうちに心にダメージを受けてしまうということもありうると思うから幼児には見せるべきものではないのではないかと思います。幼児が鬼滅に触れてしまった背景についても商業的な目的のグッズや親と共有することが増えてきた時代であることなど様々な影響もあり、またアマゾンプライムのように動画配信サービスというものの普及が背景にあると思いました。それらの普及とコロナが重な

り、親がはまってしまったものを家にずっといる子どもが見るといったことにより、そういった違う対象の世代にまで広がっていったのだと思います。』

Ⅳ. 子どものための作品の創造

2回にわたって、学生たちが作った子どものための作品を紹介して、感想を述べあった。表3は

学生たちの作品と後日提出した解説だ。絵本には素材として紙だけでなく、布やしかけを加えるなどの工夫がされていた。紙芝居やパネルシアター、手遊びを作った学生もいた。内容にはこれまでの授業での対話が影響している。多くの学生がいのち、友情、愛について、様々な表現形式で物語を展開させた。2名の学生は新型コロナウイルス感染防止のことをテーマに作品を制作した。

表3. 学生の作品名と解説

題名	解説
絵本「ほくとアフロ」	この作品は、ほかの子どもたちとは違う何かを持っている人も、それは個性でありとってもいいことだというメッセージを込めて作られた絵本です。この絵本はアフロという髪に特徴のある子どもが主人公でほかの子と髪型が違うだけで、友達がいませんでした。しかし、新しいお友達ができてそこから徐々にみんなも認めてくれて友達が増えてみんなで遊ぶようになったお話です。
絵本「しりとりえほん」	この作品は絵本であり、親子のしりとりでのやり取りが中心となって物語が進みます。1ページごとに仕掛けがなされており、しりとりが遊べる年齢の子どもだけではなく、言葉がまだうまく使えない年齢の子どもでも仕掛けを触って楽しめるようにしています。ページの最後を毎回「なーんだ?」という言葉にし見ている子どもたちに問いかける形になっている、子ども参加型の絵本です。
パズル絵本「やくそく」	牛乳パックを用いて作ったパズル絵本です。コロナ禍であるこの時代だからこそ伝えられる事がないか考えた際に、健康に過ごすにはどうすればよいかを考えてもらいたくて「健康」についての内容にしました。
絵本「ふしぎなたね」	作品のコンセプトは、「協力」「支え合い」「思いやり」「一人一人の存在が大切であり大きな力になること」で、これらの大切さをスケッチブックシアターを通して伝えたいと思い制作した。登場人物が実を抜く動きに合わせてスケッチブックを一緒に動かして子ども達もそれに合わせて動きたくるようにしたり、「うんとこしょどっこいしょ」と一緒に声を出すようにして参加型で楽しめるように工夫した。
絵本「みんなのいのち」	今回は、「いのちの大切さ」や「親子の愛情」などを伝えることをコンセプトに、見ていてほっこりした気持ちになれるような文化財をつくることを目標に絵本をつくりました。あらすじとしては、ひよこやコアラ、カエルなどの動物の赤ちゃんが、生まれてからお母さんに愛情を注がれて育っていく様子を絵で描いていき、最後に私たちもお母さんのお腹の中から生まれ、大切に育てられるのだということ、どの動物もみんな同じ大切ないのちを持っているのだということを描きました。字は少なめで、画用紙をめくったら絵が出てくるような小さな仕掛けをつくり、小さな子どもでも見て楽しめるようにしました。
絵本「しあわせのクローバー」	幸せの象徴といわれる四葉のクローバーはその一枚一枚が富、満ち足りた愛、名声、すばらしい健康という意味があるということを知って、そこから四葉のクローバーをモチーフにした絵本にしました。

「おにぎりかもしれない」	ヨシタケシンスケさんの「リングかもしれない」を自分なりにアレンジして作りました。この絵本を読んだ子どもたちの発想も聞いてみたいと思い、最後のページは質問を投げかけるようにしてみました。
パネルシアター「コロナってなんだろう」	「新型コロナウイルスにどう向き合うか」についても子どもも無関係ではないので学ぶ必要があると考えた。保護者や大人が新型コロナウイルスを子どもたちに説明しなければならぬと思うが、難しいことは言葉だけでは説明できないので、子どもが分かりやすく理解できる方法が必要だと考え、パネルシアターという媒体を通して子どもたちに伝えられたらと思う、この内容を選んだ。
絵本「これなーんだ？」	「親子2人でゆっくり楽しみながら読んでほしい」です。この作品のあらすじは、○や△の形から何が見えてくるか、連想できるかといった簡単な仕掛け絵本です。徐々に形が変化していく中で、答えを導いたり、その形から他に連想できるものを見つけていったりする様子を予想しています。シンプルな内容です。
紙芝居「ファイト」	この作品を通して、できないことにも挑戦してみることで、そして、当事者だけでなくその頑張っている人に「ファイト！」と励まし、一緒にできるようになったことを喜べるような子どもたちに成長してほしいという願いも込めて作品を作りました。
手袋シアター「キャベツの中から」	「キャベツの中から」という手遊び歌を歌って、子どもたちが視覚的にアオムシから蝶に成長することをイメージできると考え、手袋シアターを作った。
絵本「ゆうたくんのとくべつなよる」	自分が小さいころ好きだった折り紙を子どもたちにも好きになってほしいという思いで、折り紙を使った物語を作った。また、折り紙は折るだけでなく、切り絵もちぎっても使えることを表現したくて、星の切り絵と宇宙の場面で折り紙をちぎったものを使った。
パネルシアター「空のきもち」	今、世界中では大きな変化が現れていて、悲しい気持ちを味わう子どもたちも多くいると思う。そんな中で、自分の好きな空を使って、何か表現したいと感じた。空を見上げるということは、自然と上を見上げることにもつながり、きっと元気を与えてくれる存在だと思っていて、子どもたちにもその気持ちが伝わると嬉しいなと思い、身近な表現を使ってパネルシアターで視覚的にも興味を持ってくれるといいなと考え作った。
布絵本「わたしのものがたり」	この作品は子どもたちが、話のなかの主人公になり、世界にたったひとつだけのその子どもにとって特別な文化財となるような作品にしたいと思ってつくりました。おとなと子どもの間に形成された愛着関係をより深いものになるような1対1で読めるような絵本にしました。また、言葉の分からない乳児でも幅広い年齢で楽しむことができるように、壊れたり汚れたりしても簡単に修復、洗濯ができるため、布絵本にしました。指先の練習もできるように凸凹ボタンやチャックを用いる工夫も施しました。
絵本「ぼくはむしがきらい」	虫の嫌いな男の子が、幼稚園でアオムシを世話することになった。「友達と一緒に遊びたい」という思いから、アオムシを観察するようになる。男の子がアオムシに興味をもち始めたことを見計らって、保育者がアオムシに触ってみることをすすめる。少し勇気を出して触ったことをきっかけに、男の子はアオムシに夢中になり、アオムシの成長を見届けて少しだけ虫が好きになるというお話。
手遊び「生まれてきてくれてありがとう」	命に関する文化財として、日本語詞の誕生日の歌をあまり耳にしたことがなかったので、作詞作曲し、手遊びを付けた。歌詞では、誕生日を祝いつつ、赤ちゃんが生まれ育つまでの過程を簡単に示した。最後には出会いへの感謝が込められている。命の大切さ、感謝を訴える詞となっている。名前と年齢を入れることができる。

V. 子どもの文化財を見るまなざしの変化

15回にわたっての授業を通して、学生たちの子どものための文化財を見るまなざしの変化について、レポートをもとに分析を行なった。その結果、以下の3点の観点を抽出することができた。

(1) 作品のメッセージの多様な捉え方への気づき

一冊の絵本であっても、「悲しみというテーマで持って来る人もいれば、友情というテーマの時に持って来るというように、一つの作品に作者の伝えたいことがたくさん入っていること」、そして「読者もその時の感情や状況によって受け止め方を変える」といった気づきを記した学生が多かった。そして、学生たちは子どものための文化財に作者のメッセージが込められていることを実感した。以下は学生の感想の要約である。

- ・子どものための文化財には、作者や、読み手である親や保育者の思いや願いが込められていることを実感できた。
- ・文化財というのは、作った人の気持ちや願いや思いがすごく良く込められているものであり、人の心に浸透し、生きていく上で支えてくれるもの、生きていく上で大切なものを教えてくれるものであるという奥深いものであることを学んだ。
- ・対話を通して、自分が感じたこととみんなが感じたことにも違いがあって、同じ作品でも人それぞれ感じ方は違うのだということにも気づくことができた。
- ・文化財は子どもの心に残り続けるものであるということを実感した。素敵な文化財に出会うことで、豊かな感受性が身について、温かい心を育てることができる。

(2) 子どもへの伝え方

ある学生は、「ただ大人が作品を見せるのではなく、本当に伝えたいと思ったもの、必要だと考えたものを選別し、質の良い文化財かどうかきちんと判断して、子どもに伝えるべきだ」といったコメントを記した。別の学生は、「文化財には作者の気持ち、思いがこもったものなのだと再認識した。だから、子どもたちに伝えたいことなどを意識して、作者の伝えている細かなメッセージを意識しながら絵本、文化財を選ぶことが大切」であると記している。授業内で意見交換をした『鬼滅の刃』をも子どもへの伝え方の観点で見ると、別の捉え方ができることを知った。単に与えるだけでなく、伝える前の熟考と、伝えた後の省察に

も意識を向ける必要性を感じたのではないかと捉えている。ある学生は「子どもたちの間で流行しているからといって、それが子どもにとって必ずしも良質な文化財ではないことを理解した。」と記している。

そして、子どもたちに文化財を伝えるためには、まず何よりも大人自身の感性が鋭敏で、柔軟であることが求められることを、自らが作品を創作することで実感できたようだ。

(3) 大人も感性を耕すこと

毎回、テーマに即して一人一人が選んだ作品を紹介していく中で、学生たちは子どものための文化財の魅力に触れ、自らの心が揺さぶられる体験をした。学生たちは次のような感想を記している。

- ・保育者になった際に、文化財を教育的な手段（ここでは、子どもの気持ちを無視した大人による一方的な教授という意味合いで教育的なという用語が使われている—筆者による）として考えるのではなく、自分自身も心が動かされるものを、実感をもって子どもに伝えたい。そして、子どもが大人になっても心に残る文化財を見つけていきたい。
- ・保育者や親自身が感性を豊かにし、文化財の伝えたいことを読み取り、意識して伝えていく必要がある。
- ・子どもの目線に立った考え方や感性を育むこと、耕していくこと。感性を働かせる場が減少してしまう大人にとっても子どものための文化財は価値あるものだ。
- ・絵本を保育の道具としてみるのではなく、文化財としてみる見方が大切であることを知った。子どもが成長しても思い出に残って、懐かしさを感じられるように、絵本の良さを伝えられる保育者になりたい。
- ・保育者として文化財に子どもたちが触れる機会をたくさん作っていきたい。また、既存の文化財だけでなく、手作りの文化財には伝えたいことを自分なりに伝えられ、一層印象にも残る。
- ・様々な子どものための作品に出会う中で、大人である自分自身も考えさせられることが多く、感性を豊かにすることができた。子どものための文化財は大人にも影響を与える。文化財には年齢制限はなく、全ての年代の人々に向けられたメッセージのようなものであるという見方が変わった。これから歳を重ねても、子どものための文化財に触れることを通して、自分の感受

性を磨くようにしたいし、子どもはもちろん、保護者にも文化財の良さを伝えて、子育てを支える方法の一つとして紹介していきたい。

- ・これまで子どものための良質な文化財と聞くと、つい子どもが喜ぶものや肯定的な感情を持てるような内容の文化財を思い浮かべていた。しかし、恐怖や怒り、いのちや悲しみなどといった悲観的でマイナスのように思える感情を表す文化財にも出会うことも同じように大切であることを知った。幼少期に幅広く豊かな感受性を身につけることがその後の生活や人間性の形成に影響することを学んだ。保育者として多様な文化財を伝えていきたい。
- ・保育案を書く際に「活動につながるような絵本を読む」「季節にあったものを読む」「集まりの前に読む」など様々な絵本の活用の仕方がある。しかし、文化財は子どもの心に残り続けるもので、作品には様々な思いが込められていることから、単なるルーティーン化して内容を吟味することのないよう、子どものことをしっかりと考えた上で、選ぶようにすることが重要だ。
- ・文化財は子どもをいい子に育てる道具でも、静かにさせる手段でもなくて、子どもがそれに触れて何を感じたかを大事にしなければならない。『鬼滅の刃』のように流行しているものは注意を引きやすいから取り入れる、活動を行う前に子どもたちを静かにさせるために手遊びを行う、といったように大人の都合が良いように文化財を用いるのは、本来の文化財の持つ目的とは異なる。作者は子どもたちのことを考え、「伝えたいこと」を込めている。保育者や保護者はその込められた思いを読み取り、その魅力を十分に理解しておくことが必要だ。伝える側の大人がその魅力を感じ、深く味わい一緒に楽しむことで、その思いや感情が子どもたちにも自然に伝わり、そこで文化財の良さが最大限に発揮されるのだと思う。文化財を用いる際には、自らが文化財を体験し、込められた思い、伝えたいことを十分に理解する心がけが必要なのだ。
- ・身近な保育者、保護者は子どもの年齢や性格に適した文化財を取捨選択する必要がある。子どもたちのことを近くで見ているからこそ、可能なことであるため、保育者や保護者は非常に重要な役割を担っていると感じた。
- ・ただ一つのテーマについて考え、語り合うという時間は大人になってからはあまりなく、授業

の中での対話は、忙しい日々の中で一旦立ち止まって、自分と向き合い、人生において大切なものに改めて気づく貴重な機会になった。私も子どもたちに、このような素晴らしい文化財を通して、大切なことを伝えていきたい。

おわりに

以上のように、15回の授業は、コロナ禍の中で感じたこと、考えたことを伝えることから始まって、特定の感情に基づいて各自が選んできた子どものための文化財の紹介と対話を中心に展開した。本稿では触れなかったが、筆者も毎回自分の選んだ絵本を紹介した。選定の理由を説明する時には、結果的に自分の人生の中での体験や思い出を語ることになった。絵本を通しての対話型授業では、教師も学生もそのテーマについての語り手であり、聞き手であり、学び手となった。実地指導講師3名は、わらべ歌、子守唄、子どもたちの生活と文化、そして子どものための演劇作りについて学生たちに話をしてくれた。彼らもまた、子どもの文化を通して、自らの人生を語ってくれた。

これらの経験をした上で、学生たちは自分で子どものための文化財を創作することに挑んだ。大部分の学生にとって初めての創作体験で、相当苦勞をしたようだった。しかし、授業全体で常に伝えてきた、間違いはないこと、上手下手はないことを心に留めて、一人一人が作品を生み出した。そして、授業の中で仲間認められ、感想を言ってもらうことが嬉しく、自信につながったようである。筆者が印象に残っているのは、学生たちが仲間一人一人の作品の良さを発見し、そこから学び、自分も真似てみたいと対話の中で語り合ったことだ。学生たちは友達が作った子どものための文化財に込められたメッセージを受け止める感性と、その良さを評価する資質能力を獲得していた。

子どものための文化財は、何かを身に付けさせようと即効性を狙って与えるものではない。真の子どものため文化財は、その人の心の底に長く、深く沈殿していき、いつか何かあった時に生きる力や勇気、希望、優しさとして芽を吹くようなものである。そしてその際、子どもには孤独の中ではなく、自分を大切に思ってくれる大人の存在を感じながら文化財に出会うことが保障されなくてはならない。筆者は授業を通して、若い学生たちのしなやかで瑞々しい感性を感じた。学生たちの感性、これこそがコロナ禍を越えて、次の時代を

担う子どもたちに生きる喜びを伝えることのできる希望なのである。

謝辞：本研究にご協力いただいた、初等教育教員養成課程幼児教育選修の学生、芥川遥人さん、伊東絢音さん、岩渕明希さん、金子桃花さん、上川歩華さん、清久心瑠さん、小林千紗都さん、小山千陽さん、柴木佐穂さん、白尾遥華さん、高橋詩織さん、平野萌さん、古庄璃乃さん、正岡玲那さん、松尾実子さん、山下ちひろさんに、心より感謝申し上げます。

註

¹ 児童文化の定義は、その内容である児童文化財、例えば児童文学、児童音楽、児童舞踊、児童演

劇、児童向け放送などの文化財を総称している場合が多い。しかし大人から与えられるものだけでなく、子ども自身が創造する児童画、児童詩、工作、音楽リズムなども含まれている。ここで留意すべき点は、児童文化では、子どもの心身の発達を促し、情操を育て、創造的活動を展開させる文化が取り上げられていることである。(大西憲明、船越晴美共編『幼児期の児童文化』(1983) 学術図書出版社、1-2頁。) なお、本稿では児童文化という専門用語とともに、文脈によって子どもの文化という表現を使用している。

² 同上書、2-3頁。

³ ハインリッヒ・ホフマン作・絵、佐々木田鶴子訳『もじゃもじゃペーター』ほるぷ出版、1985年。

